

日銀事務所長の

あさひかわ経済 ディスカバリー

30

ロシアと私

うです。

先日、旭川で朝の最低気温が零下十七度近くまで下がった日がありました。その日、東京の家族の者から「旭川、マイナス二十五度だっ!」と言われました。全国ニュースで言っていたとのこと。調べてみると、近郊の江丹別で確かに二十五度まで下がったようです。それをニュースで「旭川市江丹別では…」と報じたよ

うです。その数日後、朝のニュースで、ロシア極東地方で零下六十五度まで下がったと言っていました。日本で記録した最低気温は旭川の零下四十一度(一九〇二年)です。それよりさらに二十度以上寒かったのですね。ロシアといえば、私は旅行でこれまで三回訪ねたことがあります。そのうち二回は真冬で、日中のモスクワの気温が零下二十二度だったことを覚えています。私くらいの年齢だと、ロシアといえばソ連で



イワンクラムスコイ見知らぬ女
1883年トレチャコフ美術館蔵

命、スターリンの独裁、ブレジネフ書記長のい

の盟主だったソ連は、日本にとって大きな脅威でもありました。このため、ソ連・ロシアは、歴史的・政治的には何とも言えない暗い印象がありました。しかし、同じロシアでも、文化・芸術面では全く違うイメージがあります。音楽の世界では、ロシアは多くの偉大な作曲家を輩出しました。ロシアの音楽は、その政治的イメージからは考えられない甘く美しい旋律が特徴です。チャイコフスキーやラフマニノフのピアノ協奏曲、「白鳥の湖」などが代表的ですが、個人的にはチャイコフスキーのピアノ三重奏曲「偉大な芸術家の思い出」の哀愁を帯びた旋律が忘れられません。文学では、トルストイとドストエフスキーという世界の近代文学史上に輝く巨頭を生み出しています。長いけれども割りと素直に読めたトルストイの「安娜・カレーニナ」や「戦争と平和」、深い思索とキリスト教の精神に満ち非常に難解なドストエフスキーの「罪と罰」や「カラマゾフの兄弟」、人生でこれだけは読んでおかなければと多少背伸び

して読んだ記憶がありません。そうしたことあつて、ロシアは私にとってぜひ訪ねてみたい憧れの国でもありました。それが実現したのは、ソ連が崩壊して間もなくの頃でした。エルミタージュ美術館の巨大さと夥しい西洋絵画のコレクションに圧倒され、またロシア絵画の宝庫であるトレチャコフ美術館でも、いくつかの忘れられない名画に出会いました。宮殿や教会建築の美しさにも魅了されました。「食」の面でも、キャビアをどっと盛り付けたチョウサメのソテーなど、日本では決してお目にかかること

できない料理を信じられない安価で堪能しました。

珍奇な体験もあります。前述のレストランは、講堂のような巨大な空間に百近いテーブルが並んでいて、前方の舞台でバンド演奏があり、ウェイターがずらっと整列しているのですが、客は私一人という異様な光景でした。また、空港の土産物屋でマトリョーシカなどを買ってクレジットカードで支払いを済ませた後、横にあった別の人形が目に残りました。そこで女性の店員にこれも買いたいという、急に怖い表情になり、「一度で済ませてくれ」と怒られて

しまいました…。それも二十年以上も前の話。今は市場経済化が進み、かなり改善されていると思います。

北海道とロシアは距離的には近いのですが、地理的に背を向け合っているためか、あまり近いという感じがしません。旭川市はエジノサハリンスクと姉妹都市で、市内にはサハリンと交流している企業もあるようですが、まだまだ遠い世界のような気がしています。少なくとも、私が(毎月第四週に掲載します)



【河村賢士かわむらけんじ】一九六二年(昭和三十七年)東京都生まれ。一橋大学経済学部卒。支店は函館・福岡に勤務。二〇一五年(平成二十七年)六月、国際学園監務課長から旭川事務所長に着任。趣味は登山、スキ